

G・A・ダリオー著『エレガンスの事典』 —ヨーロッパエレガンスの原点と女性たちへのメッセージ—

大本 郁子¹

“ELEGANCE” by Geneviève Antoine Dariaux ; The Complete Guidance for Women’s Fashion Based on European Elegance

Ikuko Ohmoto

1. はじめに

本書『エレガンスの事典』は、パリのオートクチュールでディレクトリス（支配人）として活躍したジュヌヴィエーヴ・アントワヌ・ダリオー女史（以下ダリオーと言う）によって 1964 年に書かれた原書 “*ELEGANCE : A complete guide for every woman who wants to be well and properly dressed on all occasions*” の翻訳本である。訳者であり自身もファッション業界に携わる吉川和志氏²は、本書の翻訳に当たり次のように延べ、本書が当時の日本の繊維及び服飾業界の発展に寄与するものと確信し、強い使命感を持って翻訳に臨んだことがうかがえる。「戦後、日本には、西欧式の婦人服飾が急に広まりました。しかし服飾を組み立てるものになる西欧の正統的な考え方になりますと、本格式の素養を修めた人も少数はありますが、一般には、自己流と商売の手前勝手が多く、無秩序に混乱しているように見受けます。西洋式の婦人服飾は、西欧の正統的な考え方で組み立てねばならないというのが、私の考えなのですが、さて、西欧の正統的な服飾の考え方となりますと断片的な話は聞けましても、総合的な姿は、とらえることができなかったのです。³」と吉川氏は述べている。

本書はまさに戦後日本の服飾の発展に理論的裏付けを与え、その後の日本のファッション界を牽引した稀代のファッション書として高く評価されるものと考ええる。

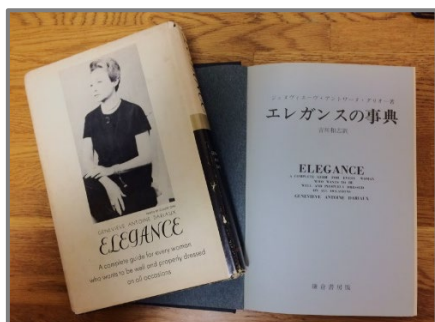


写真 左より原書“ELEGANCE”（1964）、『エレガンスの事典』（1966）

¹ 昭和女子大学 現代ビジネス研究所 研究員

² 1915 年生まれ。全購連、満州国政府、繊維貿易公団などを経て、1966 年当時は呉羽紡績デザイン室長。

³ 『エレガンスの事典』訳者まえがきより p.VIII

2. 著者ジュヌヴィエーヴ・アントワヌ・ダリオールについて

著者ダリオールは、1914 年、パリに生まれる。父はレントゲン専門医、母は作家のコレットらとの親交のあった教養の高い女性であった。ダリオールは少女時代から、母に連れられて、ポール・ポワレ、ジャン・パトゥ、ランバンなどの店に出入りするうちに、まさに黄金時代を迎えていたオートクチュールの魅力にとりつかれてしまう。その後、21 歳で結婚。1946 年から自身で創作を始めたコスチュームジュエリーをパリのクチュリエだったリュシアン・ルロンに見せたことから、オートクチュール相手のアクセサリー作家となり、ダリオールは、オートクチュールのパリュリエール（アクセサリー作家）という専門職種の称号を得、さらにモデリストとしてジャン・パトゥの店に勤め始める。その後、パリに自分の店「ジュヌヴィエーヴ・ダリオール」を開くが、まもなくニナ・リッチの主任デザイナーであった J・F・クラエーに誘われ、ニナ・リッチのサロンのディレクトリス（支配人）として 8 年間働くこととなる。クラエーは、60 年代、70 年代を通じて、バレンシアガ、ディオールに次ぐ第 3 のクチュリエとして名高いデザイナーであり、クラエーを尊敬する彼女は、彼と一緒に働くことに啞然とするくらい感激したという。

本書『エレガンスの事典』は、このニナ・リッチのサロンに在職中、ダリオールの顧客であったアメリカの編集者の懇請を受けて書かれ、1964 年にニューヨークで出版された。日本語版はその 2 年後の 1966 年に鎌倉書房からダリオールと同世代である前記の吉川氏の翻訳によって出版され、好評を得て版を重ねた。彼女は新聞・雑誌、講演会、そしてテレビ出演とあらゆる方面でエレガンス指導者として、フランス国内はもちろん海外でも活躍し、1966 年には鎌倉書房と松坂屋の招きで初めて来日もしている。

3. 『エレガンスの事典』について

本書はファッションの本場と言われるフランスの伝統に基づき、衣服の選定や着こなしについて真のエレガンスとはどういうものか、という視点で具体的事例をあげて書かれている。すなわちヨーロッパアンエレガンスを体現するためのノウハウを、ダリオール自身の幅広い経験や深い造詣により、時には辛辣に、時にはユーモアを交えて、A のアクセサリー（Accessories）から Z のジッパー（Zippers）まで、アルファベット順に実に 196 項目にわたって衣服、アクセサリー、ジュエリー、毛皮、香水、髪型、趣味など項目別に述べており、それも年令や体形、時刻や季節、社交の時、あるいは娯楽、そしてスポーツや旅行など、その時々の TPO に最もふさわしいファッションを明らかにしている。例えば「さまざまな洋服の袖の長さに対してどのような手袋が最適か。」あるいは「エレガンスとシックの違いは何か。」など、ファッションに関するあらゆる具体策から女性としての心構えなどの概念的なことに至るまで、しかも新しいトレンドを十分加味し、それらにも柔軟に対応することを忘れずに、優しい眼差しをもって彼女は読者に語りかけるのである。

本書はアメリカで装いの名著としてベストセラーとなり、その後 9 カ国語に翻訳され世界の女性の間で広く読まれた。日本版も、1967 年には 10 刷と重版を重ねて人気を博した。

4. 『エレガンスの事典』の時代背景と意義

ダリオーが多感な青春時代を過ごしたのは前世紀末から続いたベル・エポック時代⁴が終りを告げ 2 つの大戦を経て、男子服よりはるかに遅れていた婦人服の近代化が進行中の時代であった。また、本作品が書かれたのは、パリのメゾンを中心とするオートクチュール全盛時代であり、一方で折からの女性の社会進出が始まり、着にくいホップルスカート⁵やコルセットが次々に追放されていった服飾の上でも女性が解放されていく時代でもあった。

従って、本作品には長年オートクチュールの現場に携さわってきたダリオーならではの伝統的ヨーロッパエレガンスの貴重なノウハウが色濃く反映されながらも、同時に装いの主軸がプレタポルテ⁶に向かおうとする新時代の女性への、エレガンスを損なうことのない実務的なアドバイスとエールも含有しているという特徴がみられ、故に本書は単に伝統的なファッションの指南書に留まらず、多くの女性の共感を呼んだと言える。

なお、本書の冒頭で著者ダリオーは、まず次のように読者に呼びかけている。「エレガンスとは何でしょうか。それは、調和とも言うべきもので、美しさはどこか似たところもあります。違ってきますのは、美しさのほうが生まれつきのものであることが多いのに、エレガンスの方は、修練を重ねた末に備わってくることです⁷」。次に、彼女は自身の使命を次のように表現した。「私がいちばん好きなのは、衣装の上手な着こなし方をものにするのに必要な、暇も経験もないけれど、専門家の意見を役立てて、エレガントになりたいと思っていच्छやるお客さまなのです。とりたてて変わったことのない女性を、エレガントな女性に変貌させること、これが私の使命だと言いたいのです。・・・(中略)・・・さて、みなさんは、ピグマリオン⁸みたいなことをやってみてご覧になる気はありませんか。⁹」と。

これは、とりもなおさずあらゆる年代の女性たちに、「エレガンスはその修練により誰にでも実現できる」という明るい確信を持たせる彼女からの力強いメッセージに他ならない。同時に『エレガンスの事典』は、真のヨーロッパエレガンスを体現し語り継ぐ証人としてのダリオーの、新しい時代に飛び立とうとする女性たちへ向けたエールであり、装うことの楽しさや喜びを呼び覚ますことによって、彼女たちに明日への活力までも届けようとする試みであることが文章の細部から確認できる。

なお、合わせて原書を見だし翻訳者として、その後の日本におけるファッションの発展に貢献した吉川氏の功績をたたえたい。戦後の日本において急速な広まりをみせ、今日

⁴ Belle Epoque 「良き時代」。主に 19 世紀末から第 1 次世界大戦勃発 (1914 年) までのパリが反映した華やかな時代。

⁵ 19 世紀から 20 世紀の変わり目のファッションにみられた、裾が窮屈なスカートが発展したもので 1910 年～1913 年の頃に流行した。

⁶ Prêt-à-porter 「高級既製服」の意。

⁷ 『エレガンスの事典』はしがきより p.III

⁸ Pygmalion ギリシャ神話に出てくる彫刻の巧みなキプロス王。美しい女性の像を彫刻し、それに恋し、美の女神アフロディテがこれに生命を与え、生きた女性とした。『マイ・フェア・レディ』は、この筋書きをとったものである。

⁹ 『エレガンスの事典』はしがきより p.VII

もさまざまに進化し続けるファッションの変遷をたどるうえで、「西欧の正統的な考え方に立つエレガンス」を初めて解き明かした本書の日本のファッション業界へ与えたインパクトと役割は多大であった。

5. 今後の展望

ファッションの古典とも言われる『エレガンスの事典』を紐解き、ダリオーの言葉に再び耳をすませば、現在インターネット販売やファストファッション等の新しい流通の台頭により成熟飽和するファッション業界への新しい視座や道筋へのヒントを見いだすことが可能ではないか。それは、ファッションにおける原点回帰の試みであり、今後も本テーマを追求していきたい。

また、ヨーロッパのエレガンスの原点を知る書として、かつ時代を超えて受け継がれるエレガンスの本質を浮き彫りにした書として、本書が長く読み続けられていく事を願う。

なお、現在本書は絶版となっているが、後継版として同鎌倉書房より『新・エレガンスの事典』¹⁰が石井慶一訳で1990年に時代に合わせた改定が加えられ出版された。また近年では、2006年に『永久不滅のエレガンスのルール』、2015年には、『パリのエレガンスルールブック』と改題され、共にディスカヴァー・トゥエンティワンより再出版されている。

【参考文献】

・ジュヌヴィエーヴ・アントワヌ・ダリオー、吉川和志訳（1966）『エレガンスの事典』鎌倉書房。

・GENEVIEVE ANTOINE DARIAUX (1964) “*Elegance : A Complete guide for every woman who wants to be well and properly dressed on all occasions*”. DOUBLEDAY & COMPANY, INC.

・ジュヌヴィエーヴ・アントワヌ・ダリオー、石井慶一訳（1990）『新・エレガンスの事典』鎌倉書房。

GENEVIEVE ANTOINE DARIAUX (2003) “*A Guide to Elegance*”. Harper Collins Publishers.

・ジュヌヴィエーヴ・アントワヌ・ダリオー（2006）『永久不滅のエレガンスのルール』ディスカヴァー・トゥエンティワン。

・ジュヌヴィエーヴ・アントワヌ・ダリオー（2015）『パリのエレガンスルールブック』ディスカヴァー・トゥエンティワン。

¹⁰ フランスで改訂された“*ELEGANCE Revisitée* by Genevieve Antoine=Dariaux”より訳された。